

八代集和歌語彙の性格

— その意味的性格と語彙史的位位置づけを探る

西端 幸雄

1. 要旨

八代集中の和歌に使用されている自立語を抽出し、文法的・意味的性格付けをした語句データについて、データベースソフト（桐 Ver 3）によって、統計的な処理を行なった。その処理のねらいは、八代集和歌の使用語句の特徴を明らかにするとともに、同時代の仮名散文作品との関連を探ろうとするものである。

その結果、八代集和歌の使用語句の特徴としては、人間や自然を題材として、それらのあり方や行為・行動を表すものが多用されている点が明らかになった。また、同時代の仮名散文作品とも比較することによって、八代集和歌の使用語句は、物語性の強い作品よりも、和歌を媒体として物語が展開している作品と近い関係を示している点も明らかになった。

2. ねらい

『万葉集』や平安朝仮名文学作品の使用語句を、文法的・意味的に分類し、統計処理を行なうということは、夙に大野晋氏をはじめとして、阪倉篤義・浅見徹・宮島達夫・寿岳章子氏等の先学による研究がある。（注①）また、近年、田島毓堂氏による研究がある。（注②）

本稿では、そうした先学による研究成果を踏まえながら、八代集和歌の使用語句を総体的に捉え、その性格を明らかにするとともに、平安朝仮名文学作品の使用語句の示す傾向と八代集和歌の示す傾向とを比較することによって、両者の使用語句の性格の類似点と相違点を明らかにしようと思う。

3. 元データ入力と修正

本項と次項については、別に稿を成した「和歌と語彙—八代集和歌語彙の変遷」（日本語研究センター報告1）において述べている点と重複するが、本稿の論点の都合上、その煩を厭わず、敢えて掲載することにする。

本稿で使用する八代集の語句データは、『八代集総索引』（ひめ

まつの会編・大学堂書店刊)を、漢字OCR(日本語ドキュメントプロセッサ X P - 5 0 S ・富士電気)によって読み取り、元データを作成した。

ただし、『八代集総索引』には、『金葉和歌集』については、「二度本」を採用するとともに、「三奏本」の独自歌に使用されている語句をも掲載しているが、この「三奏本」に使用されている語句は、データとして採用せず、「二度本」の語句だけを、データとして採用することとした。

また、『八代集総索引』では、見出し語句を、「かすがののとぶひののもり(春日野飛火野守)」といったように、長単位で採る方針を貫いているが、その単位の長さについては、手を加えずに、『八代集総索引』のままの語形を採用した。この方針には、二律背反的な問題点がある。つまり、和歌の表現としては、表現主体(作者・歌人)の表現意識を考慮するなら、上記のような方針で単位認定を行なわなければならないが、その反面、語彙論的な立場からその使用語句を見よとするとするのなら、また、先学が提示されている短単位の統計データと比較を行なうのなら、短単位で採る方が望ましいということになる。ただ、本稿においては、元資料が八代集中の和歌であるという点に固執して、長単位で採る方針を貫いた。短単位のデータを用いての考察は、機会を改めて、提示したいと思っている。

さらに、次の問題点として、『八代集総索引』では、掛詞については、主たる意味と従たる意味の両方で採用し、それぞれ独立した見出し語として扱っている。この掛詞の判定は、揺れが存在する可能性と、多少恣意的に行なわれる可能性があることは免れないが、本稿では、『八代集総索引』の方針をそのまま採用し、主たる意味と従たる意味の両方を、それぞれ独立した語句として扱った。その理由は、ある語句が、掛詞として、主たる意味と従たる意味の両方を表現する意図を持って使用されているということは、その時代において、当該語句が、主たる意味をも従たる意味をも表し得たことは明らかであり、本稿のねらいである、和歌中の使用語句の性格を探るという場合、当然、主たる意味だけではなく、従たる意味をも採用せざるを得なくなるという点にある。この点、語句を統計的に扱う場合、二重に計算するという点で問題は残るが、一方で、現実には二重に使用されている語句を、主たる意味だけで採用することは、従たる意味で使用されている語句を無視することにつながり、語彙史研究の面からは問題があると言えよう。(注③)

なお、『八代集総索引』中には、若干の誤植が存在したので、それらについては、独自に訂正を行なった。

一方、『万葉集』の語句データは、『萬葉集総索引・単語篇』(正宗敦夫編・平凡社刊)によって、取り込んだのであるが、その

際、八代集において、用例が存在するものだけを、『八代集総索引』と同様の基準で照合し、採用することとした。

4. 語句データの性格付け

以上のような手続きを経て得られた語句データに、文法的・意味的性格付けを行なった。そのよりどころとした資料は、『分類語彙表』（国語研究所編・秀英出版刊）である。この『分類語彙表』は、現代語を文法的・意味的性格に分類しているため、古語を適用する場合、様々な問題点はあったが、『分類語彙表』の分類方法に照らし合わせて、古語の分類についても、できる限り厳密な作業を行なった。

いま、その文法的・意味的性格付けの基準を摘記すると、下記の通りである。ただし、この基準のうち、現代語と古語との性格の違いによって、『分類語彙表』では取り扱われていない「枕詞」の分類が問題となったが、本稿においては、この「枕詞」を、便宜的に大分類の<4>類に入れることにした。

大分類（1000の位・文法的性格）

- 1 体の類 名詞
- 2 用の類 動詞
- 3 相の類 形容詞・形容動詞・連体詞・一部の副詞
- 4 その他 接続詞・感動詞・一部の副詞・枕詞

小分類（100の位・意味的性格）

- 1 抽象的関係（人間や自然のあり方のわく組み）
- 2 人間活動の主体
- 3 人間活動—精神および行為
- 4 人間活動の生産物—結果および用具
- 5 自然—自然物および自然現象

なお、『分類語彙表』では、各語句を、さらに細かく意味別に分類し、全体として、3～4桁のコード番号で、それぞれの語句の文法的・意味的性格を表しているが、本稿においては、小分類以下の位の分類（10の位以下）は、特に断わらない限り、取り扱わないこととする。また、大分類の<4>類については、『分類語彙表』では、<41><43>といった小分類を施しているが、本稿においては、その小分類は施さず、大分類のみにとどめた。

さて、上記の基準によって、文法的・意味的性格付けを行なったのであるが、それぞれの分類に該当する具体例を示すと、以下のようになる。

・ 文法的・意味的性格付けの具体例

- 11 あかつき（暁）、あき（秋）
 12 あま（海人）、あかし（明石）
 13 あきのこころ（秋心）、あきのわかれ（秋別）
 14 あかぢのにしき（赤地錦）、あきた（秋田）
 15 あかつきつゆ（暁露）、あきやま（秋山）
 21 あかす（明）、あぐ（上）
 23 あかしくらす（明暮）、あく（飽）
 25 ある（荒）、いく（生）
 31 あさし（浅）、あし（悪）
 33 あさまし（浅）、あぢきなし（味気無）
 35 あかし（明・赤）、きよし（清）
 4 あかねさす（茜）、あな（感動）

5. 八代集和歌における自立語の性格

まず、八代集和歌全体に使用されている語句の性格を、異語数と延語数の、それぞれの場合について、整理してみると、以下の表のようになる。

表1 八代集全体における自立語の性格

性格	11	12	13	14	15	21	23	25	31	33	35	4
異語数	816	1184	376	656	1503	1424	812	203	527	172	65	113
割合%	10.4	15.1	4.8	8.4	19.1	18.2	10.3	2.6	6.7	2.2	0.8	1.4
延語数	9015	7722	3677	3498	13258	11486	13123	2665	6472	1881	561	997
割合%	12.1	10.4	4.9	4.7	17.8	15.4	17.6	3.6	8.7	2.5	0.8	1.3
使用度	11.0	6.5	9.8	5.3	8.2	8.1	16.2	13.2	12.3	11.0	8.6	8.8
	体の類					用の類			相の類		その他	総計
異語数	4535					2439			764		113	7851
割合%	57.8					31.1			9.7		1.4	
延語数	37170					27274			8914		997	74355
割合%	50.0					36.7			12.0		1.3	
使用度	8.2					11.2			11.7		8.8	9.5

（異語総数 7851語） （延語総数 74355語）

割合% = 性格別（異・延）語数 ÷ （異・延）語総数 × 100

使用度 = 延語数 ÷ 異語数

この表1によって、まず、語句の文法的性格別にそれぞれの占める割合を見てみると、コード番号の頭が<1>、つまり、体の類が全体の、

異語数 57.8% 延語数 50.0%

を占めており、また、コード番号の頭が<2>、つまり、用の類が全体の、

異語数 31.1% 延語数 36.7%

を占めていることが分かる。つまり、八代集和歌における使用語句は、異語数で88.9%が、延語数では86.7%が、体の類(名詞)と用の類(動詞)で占められており、相の類(形容詞・形容動詞・副詞)などの占める割合は、きわめて僅かであるということになる。この点からすれば、八代集和歌の使用語句の性格を決定づける要因は、体の類と用の類が担っているといっても過言ではないだろう。

では、その八代集和歌の使用語句の性格を決定づけているものを、より限定すれば、どのような性格の語句であるのだろうか。その点を明らかにするため、前掲の表1によって、<11>から<4>の文法的・意味的性格別に、それぞれの語句の占める割合を見てみると、異語数で見れば、<15>(体の類で、自然物および自然現象を表す語句・19.1%)がもっとも高い割合を示し、次いで、<21>(用の類で、人間や自然のあり方のわく組みを表す語句・18.2%)や<12>(体の類で、人間活動の主体を表す語句・15.1%)が高い割合を示していて、それら3種類の語句だけで、八代集に使用されている自立語(異語数)の52.4%を占めていることが分かる。

一方、延語数で見れば、まず、異語数の場合と同じく、<15>(体の類で、自然物および自然現象を表す語句・17.8%)がもっとも高い割合を示し、次いで、<23>(用の類で、精神および行為を表す語句・17.6%)や<21>(用の類で、人間や自然のあり方のわく組みを表す語句・15.4%)が高い割合を示していて、それら3種類の語句だけで、八代集に使用されている自立語(延語数)の50.8%を占めていることが分かる。

以上に提示した傾向をまとめれば、八代集和歌の使用語句の性格を決定づけているのは、体の類では、<12><15>、用の類では、<21><23>の性格を表す語句であると言える。

こうした八代集和歌の使用語句の意味的性格が示す傾向は、和歌が、主に自然や人間を題材として、それらのあり方や行為・行動を詠み込んだものであるという点を如実に表していると言えよう。



次に、 $\langle 11 \rangle$ から $\langle 4 \rangle$ の文法的・意味的性格別に、それぞれの語句の使用度数（語句1語が何度使用されているか）を見てみると、全体の使用度数の平均（総延語数÷総異語数）が9.5であることからすれば、 $\langle 14 \rangle$ （体の類で、人間活動の生産物——結果および用具を表す語句・5.3）や $\langle 12 \rangle$ （体の類で、人間活動の主体を表す語句・6.5）が低い使用度数を示しているのに対して、 $\langle 23 \rangle$ （用の類で、精神および行為を表す語句・16.2）や $\langle 25 \rangle$ （用の類で、自然——自然物および自然現象を表す語句・13.2）や $\langle 31 \rangle$ （相の類で、人間や自然のあり方のわく組みを表す語句・12.3）が高い使用度数を示している。

これは、言い換えるなら、使用度数の低い $\langle 14 \rangle$ や $\langle 12 \rangle$ に該当する語句は、語種は比較的豊富であるが、それぞれの語句が多用されることはないということを示しており、一方、使用度数の高い $\langle 23 \rangle$ や $\langle 25 \rangle$ や $\langle 31 \rangle$ は、語種は比較的乏しいが、それぞれの語句を多用しているということを示している。

ということからすれば、先に、八代集和歌の使用語句の性格を決定づけているのは、体の類では、 $\langle 12 \rangle$ $\langle 15 \rangle$ 、用の類では、 $\langle 21 \rangle$ $\langle 23 \rangle$ の性格を表す語句であるとしたが、より限定すれば、総異語数や総延語数に占める割合も高く、使用度数が平均的な $\langle 15 \rangle$ $\langle 21 \rangle$ の性格を表す語句が、八代集和歌の使用語句の性格を決定づける大きな鍵を握っていると言えよう。なお、八代集中の各歌集の使用語句の特徴を捉えた場合も、同じような傾向が見られることについては、「和歌と語彙—八代集和歌語彙の変遷」（日本語研究センター報告1）において述べた。

6. 八代集共通使用語句と単独使用語句

さて、前項では、八代集和歌の使用語句を総体的に捉えた場合、 $\langle 15 \rangle$ （体の類で、自然物および自然現象を表す語句）や $\langle 21 \rangle$ （用の類で、人間や自然のあり方のわく組みを表す語句）に該当する語句が、八代集和歌の使用語句の性格を決定する要因であることを明らかにしたが、本項では、視点を変えて、八代集の全歌集に共通して使用されている語句と1歌集にだけ使用されている単独使用語句とを比較することにより、八代集和歌の使用語句の性格をより一層明らかにしてみたい。

まず、八代集の全歌集に共通に使用されている語句を性格別に分類すると、次の表2のような傾向を示す。

表 2 八代集和歌共通語彙の分類

性格	11	12	13	14	15	21	23	25	31	33	35	4
異語数	62	27	23	14	78	75	55	20	48	11	6	2
割合A	7.6	2.3	6.1	2.1	5.2	5.3	6.8	9.9	9.1	6.4	9.2	1.8
割合B	14.7	6.4	5.5	3.3	18.5	17.8	13.1	4.8	11.4	2.6	1.4	0.5
延語数	5500	4326	2229	1321	6972	6698	9707	1760	3547	1124	221	251
割合C	60.0	56.0	60.6	37.8	52.6	58.3	74.0	66.0	54.8	59.8	39.4	25.2
割合D	12.6	9.9	5.1	3.0	16.0	15.3	22.2	4.0	8.1	2.6	0.5	0.6
使用度	88.7	160.2	96.9	94.4	89.4	89.3	176.5	88.0	73.9	102.2	36.8	125.5

割合 A = 性格別共通異語数 ÷ 性格別異語総数 × 100

割合 B = 性格別共通異語数 ÷ 共通異語数 (421語) × 100

割合 C = 性格別共通延語数 ÷ 性格別延語総数 × 100

割合 D = 性格別共通延語数 ÷ 共通延語数 (43656語) × 100

使用度 = 共通延語数 ÷ 共通異語数

この表 2 に掲出した共通異語数計 421 語は、いわば、八代集和歌の基本語彙と呼び得るものである。しかし、八代集和歌の総異語数 (7,851 語) に占める割合は、わずかに 5.4% にしかならない。ということからすれば、この異語数でもって、共通語彙の性格を判定することは、あまり大きな意味が見いだせないと言えよう。それよりは、表 2 の下段に掲出した共通延語数計 43,656 語は、八代集和歌の総延語数 (74,355 語) に占める割合が、58.7% にもおよぶ。よって、八代集和歌の共通語彙の性格を判定するには、この延語数に視点を据えて判定すれば、ある程度の傾向を把握することができよう。

そこで、主として、表 2 の下段に掲出した延語数の割合に注目すると、まず、性格別延語総数に占める性格別共通延語数の割合を示す [割合 C] が、 $\langle 14 \rangle \langle 35 \rangle \langle 4 \rangle$ を除き、すべて 50% を超える割合を示している。特に、 $\langle 23 \rangle \langle 25 \rangle$ は、74.0% と 66.0% と、きわめて高い割合を示している。これは、 $\langle 23 \rangle \langle 25 \rangle$ に該当する語句は、八代集に共通して使用されるわずかな語句が、何度も多用されていることを示している。別な見方をすれば、前掲の表 1 が示す傾向と併せ考え、これら $\langle 23 \rangle \langle 25 \rangle$ に該当する語句は、八代集和歌においては、特異な性格を表す語句を使用するのではなく、八代集すべての歌集において使用されている、ありきたりな、きわめてわずかな語句を多用する傾向が強いと見えよう。この点は、次に述べる、八代集和歌における単独使用語句の示す傾向と併せ考えれば、より一層明確になろう。

一方、表 2 に掲出した、八代集和歌の基本語彙と呼び得る共通語

彙の性格について、共通延語数（43,656語）に占める性格別共通延語数の割合を示した〔割合D〕を見てみると、＜11＞＜15＞＜21＞＜23＞が高い割合を示していることが分かる。また、これらに該当する性格を表す語句は、共通異語数（421語）に占める、それぞれの割合〔割合B〕も、比較的高い。ということは、前項でまとめた、八代集和歌の使用語句全体の傾向と、ほぼ同じ傾向を、共通語彙の場合も示していると言える。



では、次に、1歌集にしか使用されていない単独使用語句の示す傾向を見てみることにする。この単独使用語句の傾向を見るということは、本稿のねらいとする八代集和歌の使用語句を総体的に見て、その傾向を把握するという点からは、矛盾するようではあるが、この単独使用語句を性格別に分類することにより、どの性格を表す語句が、単独に使用される割合が高いかを明らかにし、上で見た共通語彙の示す傾向と対比すれば、八代集和歌における使用語句の傾向をより一層明らかにできるのではないかと思う。

そこで、表3で、八代集和歌の使用語句の中で、1歌集にしか使用されていない単独使用語句の異語数を、性格別に分類して示して見ることにする。（ただし、この表3におけるデータは、『万葉集』についての比較対照はしていない。）

表3 八代集和歌単独使用語句の性格

性格	11	12	13	14	15	21	23	25	31	33	35	4
単独総数	355	650	188	367	694	739	407	80	200	72	31	45
性格別総数	816	1184	376	656	1503	1424	812	203	527	172	65	11
割合	43.5	54.9	50.0	55.9	46.2	51.9	50.1	39.4	38.0	41.9	47.7	39.9

この表3によると、1歌集にしか使用されない語句としては、八代集における、性格別異語総数に占める性格別単独異語数の割合を見ると、＜12＞＜14＞に該当するものが、54.9%・55.9%と、高い割合を示している。この傾向を、前掲の表2と比較してみると、表2の、性格別異語総数に占める性格別共通異語数の割合を示した〔割合A〕を見ると、これら＜12＞＜14＞は、その割合が、それぞれ2.3%・2.1%と、きわめて低い割合であることが分かる。ということは、つまり、＜12＞＜14＞に該当する語句は、八代集和歌の使用語句としては、共通に使用されるより、1歌集において単独で使用される傾向がきわめて強いということになる。

それに反して、表2〔割合A〕において、共通語彙として使用される割合が比較的高い<11><25><31>は、単独に使用されている割合が、43.5%・39.4%・38.0%と低い。

こうした傾向は、前掲の表1に掲出した使用度数にも反映していると言える。つまり、表1における〔使用度数〕6.5と5.3しか示さない<12><14>に該当する語句は、語種は比較的豊富であるが、特異な語句を多く含むため、それぞれの語句が、一部の片寄った歌集にしか使用されないため、幅広く多用されないという傾向を示していると言えよう。それに対して、表1における〔使用度数〕が11.0や13.2や12.3を示す<11><25><31>に該当する語句は、語種は比較的乏しいが、和歌の基本語彙と言い得る、一般性を持った語句を多く含むため、単独使用語句として使用されるより、共通語彙として使用される傾向が強いと言えよう。

7. 仮名散文作品との比較

では、ここで、これまで見てきた八代集和歌全体における各性格別語句の中、体の類と用の類に限って、仮名散文作品などと対比することによって、八代集和歌の使用語句の性格を、より一層明らかにし、また、仮名散文作品それぞれの使用語句の性格をも明らかにしてみたい。

比較の対象とした作品は、以下に掲げた、『古典対照語い表』（宮島達夫編・笠間書院刊）に掲載されている『万葉集』『竹取物語』『伊勢物語』等、14作品の中、歌集の『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』と、時代が下る『方丈記』『徒然草』を除く仮名散文作品9作品と、田島毓堂氏の『栄花物語』和歌（注④）である。

表4 仮名散文作品等10作品の分類

作 品	大鏡	栄花	更級	紫日	源氏	枕草	蜻蛉	土左	伊勢	竹取
異語数										
体の類	63.9	51.8	49.1	50.7	42.5	53.5	47.1	55.0	54.6	44.3
用の類	25.8	30.3	35.5	33.9	44.6	34.7	38.2	30.6	31.9	40.2
その他	10.3	17.9	15.4	15.4	12.9	11.8	14.7	14.4	13.5	15.5
延語数										
体の類	53.2	52.5	46.8	52.6	41.7	44.2	40.8	49.7	49.3	45.0
用の類	29.6	32.2	34.4	28.2	32.9	32.7	38.1	34.6	36.9	39.9
その他	17.2	15.3	18.8	19.2	25.4	23.1	21.1	15.7	13.8	15.1

単位認定の基準として、『古典対照語い表』などでは、短単位で採

っているのに対して、本稿が依った『八代集総索引』では、長単位で採っているという違いがあるので、厳密な比較はできないものの、先に掲げた表1と、この表4を対照してみると、八代集和歌の使用語句の性格は、物語性の強い『竹取物語』『蜻蛉日記』『源氏物語』『更級日記』『大鏡』とは大きく異なっていることが分かる。その反面、『伊勢物語』『土左日記』『枕草子』とは近い関係にあると言える。

その中でも、特に注目すべきは、異語数では、『土左日記』（体の類55.0% 用の類30.6%）が、また、延語数では、『伊勢物語』（体の類49.3% 用の類36.9%）が、最も近い数値を示している点である。これらの傾向の中、『土左日記』については、浅見徹氏が、すでに、「（体の類を基準にとった場合は）後撰と土左との間は、土左と竹取の間よりも近い」（注④）と述べておられる点と符合する。

一方、これら八代集和歌と比べ、最も遠い数値を示す作品は、異語数と延語数ともに、『源氏物語』（体の類・異語数42.5% 延語数41.7% 用の類・異語数44.6% 延語数32.9%）であることも分かる。

以上に指摘した傾向は、まず、八代集和歌の側から見れば、これまで言われてきた和歌語彙の特性を追認しただけではあるが、八代集和歌の使用語句は、『竹取物語』『源氏物語』などといった物語性の強い作品の使用語句とは、性格を大きくことにしていると言える。また一方、仮名散文作品の側から見れば、『土左日記』『伊勢物語』『源氏物語』の作品の性格と深く関係するものであるとも言えよう。つまり、『土左日記』は、歌物語とまでは言えないにしても、和歌を契機にして話題が展開する日記であり、『伊勢物語』は、和歌を中心として物語が展開する歌物語であるのに対して、『源氏物語』は、人事に関わる事柄を中心として物語が展開する、純粋な物語、言い換えるなら典型的な散文であるという、それぞれの作品の性格の違いが用語の違いをも決定づけているのであろう。

8. むすび

以上、八代集和歌の使用語句を総体的に捉え、その性格の特徴を明らかにするとともに、平安朝仮名散文作品との関連性についても述べてきた。その結果、一応の傾向を提示することはできたと思う。

しかし、本稿で使用した元データが長単位であり、比較の対象とした仮名散文作品側では、短単位でデータを採集しているという、根本的な相違点があるため、本稿で求められた、平安朝仮名散文作品との比較結果に対する信頼度が低くなることは否めない事実である。その点、元データを短単位で採集して、稿を改めたい。

さらに、八代集の各歌集の使用語句の示す傾向については、別に「和歌と語彙—語彙の変遷と八代集和歌の変遷」(日本語研究センター報告1)として発表したもので、参照していただきたい。また、雑誌「日本語研究センター報告」には、本稿を成すにあたって、使用した八代集語句データを、データベースソフト「桐」のファイルを、5インチフロッピーで提供しているので、利用していただきたい。

- 注① 阪倉篤義 「万葉語彙の構造—(その一)名詞について—」
(万葉34)
浅見徹 「講座国語史3・語彙史・第3章古代語彙Ⅱ」
(大修館書店刊)
宮島達夫 「語いの類似度」(国語学82)
寿岳章子 「源氏物語基礎語彙の構成」(計量国語学41)
- 注② 田島毓堂 「栄花物語の語彙研究序説—和歌の語彙について」
(名古屋大学国語国文学69)に同種の問題提起がある。
- 注③ 注②に同じ。
- 注④ 浅見徹 「講座国語史3・語彙史・第3章古代語彙Ⅱ」
(大修館書店刊)